

ピンダロスにおける

ヘクロノス⁽¹⁾について

中津海 理恵

序

ピンダロスにおける時——*χρόνος*——の概念については、多くの研究者によって論じられてきた。⁽¹⁾一九五五年、H・フレーンケルは、ホメロスにおいて、*χρόνος*は、けっして、積極的な行為者ではなかった。それは、何か出来事が生じた時、その出来事を生じせしめた要素の一つに過ぎなかった。しかし、ピンダロスにおいて、*χρόνος*は極めて積極的な実行力を背負い込んだ。*χρόνος*は実現させるものである。希望と危険から、可能性から、*χρόνος*は現実を創り出すのである。と指摘した。⁽²⁾以後、この指摘は、ほとんどの研究者に受け入れられてきた。⁽³⁾一九七二年、P・ビバンテは、ピンダロスにおける*χρόνος*は、瞬間の連続を表現するものではなく、未来をめざし、運命的な方向をめざしているものである。*χρόνος*は、時がもたらす成熟と達成を表わすものである。ピンダロスにおいて、時、運命、神は、互いに溶け合っており明白に区別することの出来ない。*χρόνος*は、自然の時に覆いかぶせられた神話的構想の表現である、と述べ、これを「神話の時」と呼んだ。⁽⁴⁾これに対して、一九七四年、C・シーガル

は、第一ネメア勝利歌の詳細な研究において、*χρόνος*は、成熟と完成をめざす永遠的な動きであると同時に、瞬間の状況を常に次の瞬間に引き渡していくもの、すなわち瞬間の連続をも表現するものである、と指摘している。⁽⁵⁾

ピンダロスは、現存している作品の中で、四十一ヶ所において、*χρόνος*という語を使用している。そのうち十三ヶ所において、*χρόνος*は行為者として述べられている。そのほとんどは、「ピンダロスにおいて、*χρόνος*は実現させるものであり、成熟させるものである」と指摘した研究者たちの証拠として取りあげられた箇所である。

⁽¹⁾ *χρόνος* 時は蛇どもを締め殺して、彼らの身体から魂を抜き出した。(Mem. 1. 46—47)

来たるべき時が幸福を掻き乱すことのないように。(O16. 97)

来たるべき時よ、遠くからやって来るものよ。汝、私の未

だ果さぬ務めを恥じ入らせよ。(col. 10. 7)

言ふる。(ol. 10. 52—55)

運命の君は、私にある種の徳を与えた。私はよく知っているのだ。来たるべき時、⁹が運命づけられたことを成就させるといふことを。(Nem. 4. 41—44)

これらの箇所によると、*xōnos* は、蛇を締め殺すことが出来、幸福を掻き乱すことが出来、又、恥いらせることの出来るものである。このように *xōnos* が何かを成すという表現は、それ以前の詩人たちにも、又、同時代の悲劇作家、アイスキュロスにも見られるのではなく、フレーンケルを始めとする多くの研究家たちが指摘しているように、ピンダロスに新しいものと言ふことが出来るであろう。しかしながら、前記の第四ネメア勝利歌において、『時』は運命づけられたことを成就させる』と述べられている。ここで見る限り、運命づけられたことは目的であり、それを成就させるのが *xōnos* である。ピバンテが述べている「神話の時」においては、本来の時、運命、神は溶け合っており、明白に区別することの出来ないものであるが、果して、ピンダロスは、時を運命や神と同様のものとして考えていたのであろうか。さらに又、ピンダロスが、

しかし、その昔の儀式には、モイラたちが立ち合っていた。そして又、唯一、誠の真実を知らしめるクロノスが立ち合っていたのだ。クロノスは、先へ進みながら明らかなことを宣

と語った時、モイラたちとクロノスは、必ずしも、同じ機能をもって立ち合っていたのではなく、各々、別の役割を担って立ち合っていたのではないかという疑問も生じる。この論文は、これらの問題を足掛りとして、ピンダロスにおける *xōnos* の概念を考察しようというものである。

一

ピバンテは、「ピンダロスにおける *xōnos* は、瞬間の連続を表現するものではない。」と述べた。果して、ピンダロスにおいて瞬間の連続としての *xōnos* は、全く認められないものであろうか。ある一定の期間を示す言葉を時間、過去から未来へ絶えず流れていく一つの大きな流れを時とするならば、ピンダロスが『来たるべき時』が幸福を掻き乱すことがないように』(col. 6. 97) と語った時、ここに見られる *xōnos* は、確かに、時間ではなく、時を意味するものであると思われる。しかしながら、考えねばならないのは、*xōnos* には、しばしば、全ての (Fr. Pyth. 1. 46. ἀραυρα. ol. 13. 25. Nem. 1. 69. ὀλιυ. Nem. 3. 49. ol. 2. 30. οὐρανυρι. ol. 6. 57) という形容詞が付けられ、*οὐρανυριος*。全 *xōnos* にはどのような意味が与えられているのであろうか。次のような箇所がある。

そして、母は、彼が、全時間πᾶσα ἡμέραに渡って、この不滅の名で呼ばれるであろうと宣言した。(ol. 6. 56—57)

この場合には、『不滅の名で』と述べられていることから、全 *Xaiouos* は、永遠を表わす言葉であると思われる。確かに、全 *Xaiouos* は、不死なるもの、神々にとっては、永遠を表わすものであろう。しかしながら、死すべきもの、人間にとっては、その生涯が全 *Xaiouos* であると考えられる。ピンダロスは、又、ある人間の生涯を表わす時にも、全 *Xaiouos* という表現を用いている。

というのも、全時間πᾶσα ἡμέραが、これまでのように、あなたを幸福と富の贈り物へと真直ぐに導くならば、あなたに諸々の労苦を忘れさせてくれるのだから。(Pyth. 1. 46—47)

これは、ピュトリーの競技会における戦車競技の優勝者、エトナのヒエロンに捧げられた言葉であるが、ここで述べられている全 *Xaiouos* は、ヒエロンが生きている限りを、すなわち彼の生涯を表現しているものであると思われる。人間の生涯は、死すべきものにとっての全時間であるが、同時に、永遠に流れる時の中のある一定の限られた時間に過ぎない。このように、全 *Xaiouos* は、生涯という限定された時間を表現する場合にも用いられているのである。

加えて又、もし、*Xaiouos* が一つの大きな流れのみを表現するものであったならば、何を統合して『全ての』という形容詞を用いることが出来るのであろうか。*Xaiouos* が、それと同時に、瞬間の連続をも表現するものでないならば、『全ての』という形容詞は全く意味をなさないものである。なぜなら、永遠に流れる時は、それ自身、一つのものである。*Xaiouos* が、一つの大きな流れであると同時に、瞬間の連続、あるいはある一定の期間の連続として認められた時、始めて *Xaiouos* は、それらの限定された時間を統合する『全ての』という形容詞によって表現される事が出来るのである。それ故に、ピンダロスは又、短い (*μικροῦ*) *Xaiouos* とも語っているのである。

楽しい事を除く多くの事は、人間どもにとっては意のままならぬものである。
悲しみの大うねに出合うと、短い時間μικροῦ χρόνουのうちに、大きな喜びは苦悩に変わってしまうのだ。(ol. 12. 10—12)⁽⁸⁾

ピンダロスが述べているこれらの箇所を見ると、彼が考えていた *Xaiouos* は、ピバンテが述べているような瞬間の連続を全く表現しないものではないと思われる。むしろ、シーガルが述べているように、*Xaiouos* は、一つの大きな流れであると同時に、瞬間の連続として、あるいは一定の時間の連続としても考えることが出来るものであろう。

先にあげた第一ピュティア勝利歌において、人間の生涯を表わす全 *Xaivos*、すなわち限定された時間も又、『労苦を忘れさせてくれる』ものであると述べられている。一つの大きな流れとしての *Xaivos* が何かを成すと述べられているのと同様に、限定された時間も又、積極的に何かを成す役割を担っていると考えることが出来るであろう。

では、積極的に何かを成し遂げていく限定された時間とは、いったいどのようなものであろうか。 *Xaivos* という言葉から離れてピンダロスが限定された時間を表わす他の言葉を使う時、どのように語っているのかを見てみたい。

本来、『生涯』を意味する *aiwa* という言葉がある。ピバンテは、この *aiwa* という言葉に、個人の生活から切り離された時間のより大きな意味を与えたのはピンダロスであろう。と述べている。⁽⁹⁾

生涯は、彼を祖先から続く道に沿って真直ぐに導き、偉大なアテーナイ人たちに替れを与えたのだ。(Mem.2.6—8)

運命づけられた生涯は、富と恩恵を招き寄せて、彼らの生まれながらの徳に従うのだ。(ol.2.10—11)

ピンダロスの作品の中で、*aiwa* という言葉は、十六回使われ、その中で八回、*aiwa* は行為者として述べられている。⁽¹⁰⁾ これら

の箇所において、*aiwa* も又、替れを与えることが出来、減ほすことが出来るものである。このように語られている *aiwa* も又、*Xaivos* のように積極的な実行力を担っていると言うことが出来るであろう。しかしながら、ピンダロスは、ピバンテが述べているように、*aiwa* を、それ以前の人々のように人間の一生を表現する言葉として用いたのではなく、*Xaivos* に表わされるような時のより大きな流れを表現する言葉として用いたのであろうか。

ここで考えねばならないのは、前記の第二オリンピア勝利歌の十行目に見られるように、*aiwa* には、しばしば『運命づけられた』(*hōpōros*) という形容詞が付けられていることである。⁽¹¹⁾ *Xaivos* に『運命づけられた』と形容されている箇所はない。『運命づけられた生涯』とは何を意味する言葉なのであろうか。何か運命づけられているのであろうか。

この『運命づけられた』という形容詞は、他の限定された時間を表わす言葉にも付けられている。これを見てみたい。

その後、運命づけられた日、あるいは夜は、異国の地であるたの幸せの輝しい種を受け取ったのだ。(Pyl.4.254—256)

この第四ピュティア勝利歌は、戦車競技で優勝したキュレネーの王、アルケンシラスに捧げられたものであるが、ここで語られている『運命づけられた日』とは、イアーンソンを始めとするアルゴ一船の乗組員たちが、レームムノスの女性たちと共に過ごした日の

ことである。そして、それによつて生まれた子供たちは、正に今この賛歌を捧げられているキュレネーの王の祖先である。それ故に、アルゴ船の乗組員たちとレームノスの女性たちが共に過ごした日は、『運命づけられた日』と述べられるのである。そして又、この日が、積極的行為者として、『輝しい種を受け取った』のである。すなわち、『輝しい種を受け取った』のはこの期日であり、この期日であることは『運命づけられた』ことなのである。このように、何かを成すように定められた期日が『運命づけられた日』と述べられるのであれば、『運命づけられた生涯』も又、何かを成すように定められた期間を意味するものであるとも考えられる。さらに、期間が定められることについて、次のように述べられている箇所がある。

そして、彼ら（ゼウスとペラス・アテーナイ）は、海の中で、ネーレウスの海の娘たちと共に、今後、全時間ホノクメに渡つて、不滅の人生がイノーのために定められたことを告げるのだ。
(ol. 2. 28—30)

ここで神々は、イノーの人生を全 *xeious* に渡つて定めている。この場合には、不滅の人生を定めているのであるから、この全 *xeious* は、永遠を意味するものであると考えられる。先に述べたように、*xeious* は、永遠に流れる大きな一つの流れであると同時に、瞬間の連続、あるいは一定の時間の連続である。そして、

その瞬間、あるいは一定の時間を『全ての』という形容詞によつて統合しているのであるならば、ここで、全 *xeious* に渡つて、イノーの不滅の人生を定めた神々は、又、その全 *xeious* の中の一時期にも定めることが出来るであろうと思われる。すなわち、神々は何かを定めるのであり、又、その時間も定めることが出来るのである。それ故、『運命づけられた日』が何かを成すと思へられた時、神によつて定められた期日が何かを成しているのだと考えられる。このように、何かを成す期日を定めるものが神であるならば、ピンダロスが、

そして、その同じ月の足速き日が、岩多きアテーナイにおいて、最も美しい三つの勝利の冠りを彼の髪に載せたのだ。
(ol. 13. 37—40)

と語つた時、ここには『運命づけられた』という形容詞は見られないが、この日も又、神によつて定められた日であると考えることが出来る。⁽¹²⁾ 同様のことは期日ばかりでなく期間についても言えるであろう。従つて、ある人間の生涯を表わす全 *xeious* にも『運命づけられた』という形容がなされることは可能であろうと思われる。しかしながら、一つの大きな流れである時として考えられる *xeious* には『運命づけられた』と形容されることは出来ない。それ故に、ピンダロスが、第二オリンピア勝利歌の十行目において、『運命づけられた生涯』と語つた時、この *xeious* は、

ピバンテが述べているような個人の生活から切り離された時のより大きな意味をもつものではなく、ホメーロスから使われているように、限定された時間である人間の生涯を表現するものであると思われる。そして、先にあげた第二ネメア勝利歌における *ἀρετή* も同様に定められた期間が『アテーナイ人たちに誉れを与えたのだ』と考えることが出来るであろう。すなわち、*κόσμος* は何かを成すものであるが、それを成す期日、あるいは期間は神によって定められているのである。

では、*κόσμος* が、その期日、あるいは期間に完成させ、成し遂げるものは、どのような事なのであろうか。ピンダロスは次のように述べている。

生涯が子供を持たぬ運命を授かって、彼を滅ぼすことがな
じようた。(*Col. 9. 60—61*)

子供をもたぬ運命を授かった *κόσμος* は、人間を滅ぼすのである。*κόσμος* が成すことは運命として授けられたことである。すなわち神によって定められた期間は、運命として定められた事を成すのだと考えられる。又、次のような箇所がある。

しかし、運命づけられたことは避けられないものである。

むしろ、心に反そうが心に適おうが、不意に何かを投げ与えるのは、時^{χρονο}なのである。(*Pyth. 12. 30—32*)

人間が運命づけられた事柄をはっきりと知るのは、運命づけられたことが成就された時である。それ故に、運命づけられたことが成就された時、人間にとっては、それが不意に与えられたと感じられるであろう。すなわち、運命づけられたことを人間に、はっきりと知らしめるのは *κόσμος* なのである。しかし、『運命づけられた日』、あるいは『運命づけられた生涯』に見られるように、その期間は、神によって定められたものである。そして、先にあげた第二オリンピア勝利歌の二十八行以下に見られるように、事柄を定めるのも又、神である。それ故に、序章にあげた第四ネメア勝利歌においても、『来たるべき時^{χρονος}は、運命づけられたことを成就させる』と述べられているのであろう。神々が運命を定めるといふ考え方は、ピンダロスに新しいものではない。『神の定め⁽¹³⁾が』(*Col. 20*) 等の表現は、ピンダロスの作品の中にも随所に見られる。それ故に、ピンダロスが、

時^{χρονο}の一つの運命において、その時々、微風は、素早く移り変わるのである。(*Col. 7. 94—95*)

と語った時、*κόσμος* には、運命づけられた事柄とそれが成就される期間があり、それは、神によって定められているのだと考えることが出来るであろう。

多くの研究家が指摘しているように、ピンダロスにおいて、*κόσμος* は何かを完成させ、成就させるものである。しかしなが

ら、考察してきたように、*κρονος* は、神、運命とは明白に異なつたものである。それ故に、序章にあげた第十オリンピア勝利歌において、『モイラたちとクロノスが立ち合つていた』と述べられた時、モイラたちとクロノスは、各々、別の機能をもつて立ち合つていたのだと考えられる。すなわち、モイラは神によつて定められた運命として、そしてクロノスはそれを成就させるという役割を担つているのである。神々が人間に運命を定めるといふ考へ方は、ホメーロスに始まつて新しいものではない。しかしながら、その運命を成就させるのは *κρονος* であり、*κρονος* が積極的な行為者として、これを完成させるのだといふ考へ方は、ピンドロスに独特のものである。

二

では、何故ピンドロスは、*κρονος* に対して運命づけられたことを成就させる実行力を認めたのであろうか。『運命づけられたこと』にはどのようなものが考えられるのであろうか。『運命づけられたこと』について考察することによつて、*κρονος* と運命と神の関係をより明白にすることが出来ると思われる。

運命には、よいものも悪いものもあるだろう。しかしながら、ピンドロスが運命について語る時、しばしば、そこには『生まれながらの』(*αυτης*) という形容がなされていることに気付く。

しかし、今、生まれながら、運命は、再び昔のよき風向きへ

戻るのだ。(Isth. 1. 39—40)

しかし、生まれながらの運命が、すべての行為について決定を下すのだ。(Nem. 5. 40)

このように、運命には『生まれながらの』ものがあると思われる。そして又、次のような箇所もある。

そのようにして、この者どもの祖先から伝わる喜ばしい運を担うモイラは、神々に由来する幸福を携えて、ある時には悲しみへと、又ある時には喜びへと導くのだ。(Ol. 2. 35—37)

ここでは、祖先から伝わる運命が述べられている。では、『祖先から伝えられ』、『生まれながらの』ものである運命にはどのようなものがあるだろうか。ここで、『生まれながらの』という形容詞は、先にあげた第二オリンピア勝利歌の十行目にも見られるように、しばしば、徳を語る時に付けられていることに気付く。又、次のような箇所もある。

彼は、人間どもの生まれながら (*αυτου*) の徳を恥かしめることはしない。(Isth. 3. 13—14)

そして、次のようにも述べられている。

なぜなら、アイアコスの一族のものは、偉大な徳を顕わして、卓越した運命をそこに住む人々にもたらしたのだ。

(*Nem.* 6. 47—48)

ここに語られているように、偉大な徳は、よい運命の一つであると思われる。そして、それには、『生まれながらの』ものがあるのである。多くの研究家が指摘しているように、徳は、ピンダロスにとって大きな意味をもつものである。例えば、イェーガーは、次のように指摘している。⁽¹⁵⁾ピンダロスは、貴族の性質として徳を考えていたので、彼は、徳が過去の英雄の偉大な行為と結びついているべきであると考えた。彼は、常に、その家系の誇り高い伝統をもつ尊敬すべき男として勝者を見た。そして、この勝者にいくつかの栄光を残した偉大な祖先を讃えた。さらに彼は、今日の勝者の業績をも見継らなかつた。徳は神聖である。なぜなら、神、あるいは半神は、徳を所有している家族の最初の祖先であるから。このイェーガーの指摘を裏付ける箇所は多く見られる。

その始まりは、かの英雄の神的な徳と共に、神々に由来するものである。(*Nem.* 1. 9)

『その始まり』とは、ネメア競技会におけるアテーナイのクロミウスの勝利の起りである。ピンダロスの語る徳は、競技勝利歌という性質上、武勇を示すことが多い。そして、それは神的な徳と

神々に由来するものなのである。又、ピンダロスは、次のようにも述べている。

生まれながらの栄光に包まれている人は、大いなる力をもつものである。

しかし、教育を受けている蒙昧な人間は、その時々生きていくのである。

確固とした足取りで競技場に下り立ったこともなく、無数の徳を不甲斐ない心で試みるのだ。(*Nem.* 3. 40—43)

ここに、ピンダロスが徳をもたぬものをどのように考えていたのか知ることが出来るであろう。さらに、ピンダロスは、次のようにも語っている。

さて、今、アルキミダスは生まれながらのものを披露したので。……このゼウスに由来する運命に従っている男であることを示したので。

そして又、レスリングに勤しむ者たちの間にあって、不幸な男ではないことを示した。祖父のブランドモスと同じ血を引く一族の中で、その歩みを共にしていることを示したので。

(*Nem.* 6. 7—16)

ここでは、アルキミダスは、ネメア競技会において、レスリング

の種目で優勝することによって、生まれながらのものを披露したのだと述べられている。この箇所には、徳という言葉は使われていないが、ここで披露したものは、武勇であると思われる。そして、それはゼウスに由来するものなのである。ピンダロスが本性を重要視する詩人であることは広く知られるところであるが、このように、徳は、その人間にその場で与えられるものではなく、神、あるいは半神を祖先にもつ貴族が神からの血によって分け与えられているものなのである。徳は、何代にも渡って受け継がれ、そして今、この時代に競技で優勝することによって、公けに示されるものなのである。そして、先にあげた第六ネメア勝利歌の四十七行目、又、前記の七行目以下に見られるように、徳はよい運命なのである。

xeûnos は、神によって運命づけられたことを、運命づけられた期間に成就させるものである。そして、運命づけられたことの一つには、神から血によって与えられている徳が考えられる。それ故に、ピンダロスは語るのである。

運命の君は、私にある種の徳を与えた。私はよく知っているのだ。来たるべき時、が運命づけられたことを成就させるといふことぞ。(Mem. 4. 41—44)

運命づけられた生涯は、富と恩恵を招き寄せて、彼らの生涯をながらうの徳に従うのだ。(ol. 2. 10—11)

ピンダロスは、貴族出身の詩人である。そして、ピンダロスの生きた時代は、貴族的なものが、徐々に変化していく時代であった。本来、貴族のものであった体育競技も、この時代には、すでに貴族の領分ではなくなっていた。この時代にあつて、ピンダロスは、なお競技会での勝利は、祖先から伝わる徳によるものであると考えた。その昔、祖先が神によって与えられた徳は、長い時間を経て、今、公けに示されるのである。ピンダロスにとって時は、貴族の血を示すのに重要なものであった。なぜなら、時は祖先からの徳をもたらしものであり、そして、ある時に、それは公けに示されるのである。今、ここで、神に由来する徳を示すものは、正に、時に他ならないのである。

xeûnos が、積極的な行為者として何かを成就させる。これは、他の詩人には見られないピンダロスに独特のものである。ピンダロスが、序章にあげた第十オリンピア勝利歌において『唯一、誠の真実を宣言するクロノス』と述べた時、私たちは、そこに、貴族出身の詩人、ピンダロスの誇りを感じることが出来るのではないだろうか。

注

(1) 特に問題となった箇所は、『時』は蛇どもを締め殺して、彼の身体から魂を抜き出した。』*tyrionois de xeûnos / phûras anenueou meleou apôrou*. (Mem. 1. 46—47) 訳者 C.A.M.Fennell, Pindari, *The Nemean and Isthmian Odes*, Cambridge, 1899, は、この箇所は、蛇かぐーラツル

(14) アイアロスは、ゼウスとアーンボス河神の娘アイギーナとの息子である。したがってこの一族のものはゼウスの血を引く人々である。

(15) W. Jaeger, Pindar, *The Voice of Aristocracy, Paideia* 1957, pp. 214-215,

ナキムムダ' C. M. Bowra, *Pindari Carmina* Oxford, 1935 rep. 1968. を使用した。ナダ' Nem. 1. 46-47. に引く
じだ' H. Fränkel 等に従った。